「男、突っ走る！」

第25回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内	雅也	（18）	中央高校3年2組生徒
濱口	寧々	（18）	中央高校3年2組生徒
志田	悠喜	（18）	中央高校3年2組生徒
田崎	良樹	（18）	中央高校3年2組生徒
山辺	一磨	（18）	中央高校3年2組生徒
高階	康行	（18）	中央高校3年2組生徒
中岡	壮吾	（18）	中央高校3年2組生徒
杉山	優菜	（18）	中央高校3年2組生徒
滝	由紀恵	（18）	中央高校3年2組生徒
杉島	恭平	（18）	中央高校3年2組生徒
渡部	崇	（18）	中央高校3年2組生徒
水澤	光太	（18）	中央高校3年2組生徒
宮田	春奈	（18）	中央高校3年5組生徒
尾形	安代	（54）	中央高校3年2組担任
松野	進	（58）	中央高校2年2組副担任
井深	武彦	（40）	中央高校生徒会主任

1　中央高校・全景（朝）

N「高校生活最後の夏休みは、父の単身赴任先である九州を満喫し、充実したものとなりました。そしてあっという間に休みも終わり、二学期を迎え、学校祭本番を迎えました」

2　同・体育館

生徒たちが集まっている。

司会席にやってくる雅也。側に控えている井深。

雅也「開会の言葉」

と、生徒会副会長の生徒が出てくる。

副会長「ただいまより、平成２５年度中央高校学校祭を始めます」

雅也「生徒会長挨拶」

と、生徒会長が壇上に登壇する。

N「まさかの学校祭の開会式と閉会式の司会は僕に任されてしまいました。というのも、夏休み中の生徒会定例会の時に井深先生に

言われた鶴の一声で決まってしまったのです」

3　同・生徒会室（回想）

生徒会の定例会議が行われている。

井深「学校祭の開会式と閉会式の司会は、木内に任せる」

4　同・体育館（回想戻り）

生徒会長の話を聞いている一同。

N「どうしてそんな大事なことを任せられるのか謎でしたし、何より全校生徒の前で司会をやることほど緊張することはありませんでした」

5　同・廊下

クラスTシャツを着た雅也が歩いている。

6　同・駐車場

クラスごとに、飲食のブースが出店されている――悠喜が焼きそばを焼いている。接客をしている優菜と寧々。奥で椅子に座っている安代と、焼きそばを食べている恭平。

優菜「（客に）ありがとうございました」

寧々「（悠喜に）ソース焼きそば三つ」

悠喜「あいよ」

と、雅也がやってくる。

雅也「どう？　順調にやってる？」

優菜「うん。何とか売れてる」

雅也「それは良かった」

悠喜「どうだ、木内も」

雅也「じゃあ、買おうかな。たまには、塩焼きそばにしとこう」

と、ポケットから小銭を取り出し、優菜に渡す。

雅也「（恭平に）スギちゃん、焼きそば美味しい」

恭平「めっちゃうまいぞ、これ」

雅也「本当。志田の腕が良いんだろうな」
悠喜「そりゃ二組の焼きそばが一番って言われたいからな、俺も頑張るよ」
雅也「こうやって動いてくれる人がいるから、ブース出店が上手く回るんだろうね」
安代「木内君も、生徒会として設営ご苦労様でした」
雅也「いえいえ。有志のみんなが実行委員として動いてくれたからですよ。僕なんて、ほとんど書類のチェックとか、トラブルがないか見回りをするぐらいで、大したことしてませんから」
安代「でもそういう役をやってくれる人がいるから、こういうイベントはスムーズに行くのよ」
雅也「そうですかね」
と、壮吾がサンドウィッチマンの恰好で戻ってくる。
壮吾「ただいま」
雅也「そーぴ、どうしたのそれ」

壮吾「見りゃ分かるじゃん。サンドウィッチマンだよ。二組の焼きそば美味しいよ〜って、回ってきた」
寧々「ご苦労様」
壮吾「この格好で学校中歩くの、結構恥ずかしいな」
雅也「良かった、俺じゃなかくて」
壮吾「これ、絶対うっちーがやったほうが良かったのに」
雅也「俺は良いよ。でも、本当はもっとクラス出店のほうに関わりたかったんだけどね。結局濱口たちに任せきりになっちゃって」
寧々「そんなことないよ」
悠喜「（雅也に）はい、塩焼きそばお待ち」
雅也「ありがとう」
寧々「ここは今のところ大丈夫だから、いろいろ回ってきたら？」
雅也「うん、そうする」
　と、春奈の声がする。
春奈の声「パンテーン」

と、振り返る雅也――五組の飲食ブースで唐揚げを販売している春奈。

雅也、春奈のもとへ行くと、

雅也「五組は唐揚げだったね」

春奈「一個食べる？」

雅也「もらって良いの？」

春奈「良いよ、はい」

と、爪楊枝に唐揚げを一つ指し、雅也の口に運ぶ。

春奈「美味しい？」

雅也「うん、肉汁すごいね」

春奈「そうでしょ」

雅也「二組の焼きそばも良かったら食べてって。美味しいから」

春奈「分かった、あとで買いに行く」

雅也「うん」

7　同・和室

茶道部の部員たちが、お茶を振舞っている――奥では着物を着た茶道の師崇

である初老の女性が茶筅でお茶を立てている。
雅也が入ってくると、既に真弓が座って待っている。
雅也「真弓さん」
真弓「ツリーインも来たんだ」
雅也「毎年学校祭になると、茶道部のお茶を飲みに来るのが楽しみなの」
真弓「そうなんだ」
と、茶道部員がお茶を運んでくる。それぞれ一礼し、茶碗を手にして飲み始める雅也と真弓。
雅也「やっぱりこれだわ」
真弓「あ、写真撮ってあげる」
と、側に置いていた一眼カメラで撮影をする。
真弓「またデータ送ってあげるね」
雅也「ありがとう。すごい本格的だね、カメラまで持ってきて」
真弓「だって最後の学校祭だもん。たくさん

思い出撮りたいじゃない」

雅也「（しんみりと）最後だもんねぇ……」

と、お茶を飲み干す。

8　同・体育館

有志グループのバンド発表が行われている――エレキギターを弾いている崇。

その様子を観客席で見ている雅也、良樹、一磨、康行。

一磨「崇すごいよな」

良樹「俺、絶対楽器無理だもん」

康行「俺は、和太鼓部の笛で精いっぱい」

雅也「俺はそもそも楽譜読めないし」

笑い合う一同――ノリノリでギターを弾いている崇。

N「学校祭初日である文化祭は、あっという間に終わってしまいました。クラスのブースも、夏休みの時は無事に開催できるのか不安でしたが、やはりクラスTシャツを着た効果もあったのか、クラスのみんなが団

結できたのだと感じていました。そして、有志グループのバンドでエレキギターを弾く崇の姿に感動をし、学校生活最後の文化祭は幕を閉じました。そしてその明後日には、体育祭が行われました」

9　同・運動場（二日後）

良樹と武が大縄を回している――雅也を始めとする生徒たちが一斉に跳んでいる。

N「クラス対抗大縄跳び大会では、崇と良樹が上手いこと連携を図って大縄を回してくれました。結果、三年二組は第三位という成績を残しました」

×　×　×

時間経過。

障害物リレーの準備がされている――

井深が本部テントの前からマイクで説明をしている。

井深「はい、では今から障害物リレーを開催

しますが、まずはデモンストレーションです。木内君お願いします」

と、木内がスタート地点に来る。

井深「まず第一走者の人は、ぐるぐるバッドに挑戦していただきます。十回回ってください」

と、雅也が小走りでバットが置いてあるところにやってくる。

井深「さあ、回って」

雅也、バッドを持つと回り始める。

井深「もっと早く」

周囲にいた生徒たちが雅也を回し始める――回り終わると、雅也がフラフラして転倒する。起き上がるが、まっすぐ歩けず、またフラフラして倒れる。

井深「おっと、どうした木内君」

雅也「（大きい声で）前に歩けないんですッ」

テントで座っている生徒たちから笑い声が聞こえてくる。

三年二組のテントでその様子を見てい

る悠喜たち。

悠喜「木内、美味しいなあれ」

壮吾「あれはうっちーしかできないよね」

光太「さすが、もってるわ」

寧々「だね」

笑い合っている一同。

雅也、ゆっくりと次の関門へやってくると、水槽の鰻をつかみ始める。水槽内で鰻が暴れており、苦戦しながら隣の空の水槽に移そうとしている。

雅也「うわぁー。ちょっと、何これ」

と、鰻を掴み、隣の水槽に移す。

雅也「よっしゃーッ」

と、次の関門である、粉飴に来る雅也

――顔を粉につけて、白い顔になる。

N「障害物リレーのデモンストレーションも、井深先生の鶴の一声で頼まれたものでした。少々体は張ったかもしれませんが、全校が笑いに包まれて楽しい時間を過ごせたのかもしれません」

10　同・全景（翌朝）

11　同・３年２組教室

雅也が登校してくる。

雅也「おはよう」

と、自席に座ると、痛々しく足をさする。悠喜がやってくると、

悠喜「おはよう。どうしたんだ？」

雅也「筋肉痛……」

悠喜「何で？」

雅也「多分、昨日の大縄」

悠喜「あれだけで？」

雅也「だって、普段あんなに足使わないんだもん」

悠喜「なるほど」

雅也「それに、障害物リレーでぐるぐるバットやったでしょ。あの時激しく転倒したときに、足痛めたんじゃないかな」

悠喜「あれは面白かったわ」

雅也「そう？」
悠喜「あそこの関門のお手本を木内にやらせた井深先生はさすがだと思う」
雅也「俺最初断ったんだよ」
悠喜「どうして？」
雅也「無理だって思ったから」
悠喜「いや、ぐるぐるバットと鰻掴みは、木内の為にあるようなもんだぞ」
雅也「そんなことはないと思うけど」
と、壮吾が登校してくる。
壮吾「おはよう」
雅也・悠喜「おはよう」
壮吾「なあなあ、受かったよ、俺」
雅也「え、もしかしてこの間受けた就職試験？」
壮吾「ああ」
雅也「おめでとう」
悠喜「おめでとう」
壮吾「ありがとう」
悠喜「俺たちも早く決めないとな」

雅也「そうだね」
悠喜「脚本の方はどうなんだ？」
雅也「この間、企画書と脚本送った」
壮吾「企画書も送るのか？」
雅也「うん。どうしてこの脚本を書いたのかとか、どうして今こういう物語を描く必要があるのかっていう」
悠喜「うわ、難しそう」
壮吾「やっぱり流行とか社会情勢を取り入れた方が良いってこと？」
雅也「簡単に言えばそういうことだね。今こういう問題があるから、このドラマで視聴者の皆さんに問いかけていきますっていう感じのものがいるわけ」
悠喜「ただ書きたいものを書けば良いってわけじゃないんだ」
雅也「そうなの。だから難しいの。自分の中でストーリーとか構成が思い浮かんでも、どうして今それをやらなきゃいけないのかっていう理由とかテーマを入れないといけ

ないからね」

悠喜「まだ時間かかりそうだね」

雅也「まあね……でも、そーぴが無事に決まって良かった。後は何の問題も起こさずに卒業を待つだけだもんね。大人しくしてなきゃダメだよ」

壮吾「分かってるよ」

雅也「まあ、そーぴなら大丈夫か」

悠喜「分かんないよ」

壮吾「そういうこと言うなよ」

笑っている雅也。

N「学校祭が終わったのも束の間。九月上旬に就職試験を受けたクラスメイトたちの結果が出始めていました」

12　同・職員室前（一週間後）

雅也が待っている。

N「そーぴの就職内定が決まった一週間後には……」

と、康行が書類を持って出てくる。

雅也「どうだった？」
康行「（書類を見せて）受かった」
雅也、書類を見る――『内定通知のお知らせ』と書かれている。
雅也「おめでとう、康行」
康行「ありがとう」
と、抱き合う二人。
N「康行も、内定の通知をもらったのでした。そして翌日には、ＡＯ入試を受けた水澤からも合格通知をもらったという報告を受けました」

13　同・コンピュータ室
雅也がパソコンで過去問を受験している――周囲には後輩たちの姿がある。
N「春奈たち進学クラスは、ほとんど部活に顔を出さなくなり、僕はＩＴパスポートをはじめとする検定試験の勉強を寂しく一人でやる日々が続いていました。当たり前のようだったあの部活の光景は、時の流れと

共に大きく変わっていったのでした」

と、松野が入ってくる。

松野「木内」

雅也「はい？」

松野「（賞状を渡し）はい、合格おめでとう。この間受験した、情報処理検定のプログラミング部門二級、解答の詳細が送られて確認したら、満点だったよ」

雅也「本当ですか？」

松野「どうだ、この際一月にある検定でプログラミング部門の一級を受けてみたら」

雅也「一級……」

松野「確か、情報処理検定のビジネス情報部門の一級は去年の冬に取得してたよな？」

雅也「はい。あと、今年の夏に受験したビジネス文書実務検定は一級取りました」

松野「じゃあもう二冠は達成してるから、卒業式の前の優秀成績者の表彰で登壇することは確定だな」

雅也「そうなんですか」

松野「これでプログラミングの一級も合格したら三冠達成だな。それにＩＴパスポートも合格したら、最強だぞ」

雅也「そこまで行けますかね。でもせっかくの機会なら、受けてみます」

松野「そうか。じゃあ、また一緒に頑張って勉強しよう。テキスト届いたら、また渡すから」

雅也「はい、お願いします」

と、去っていく松野――雅也、パソコン操作を再び始める。

Ｎ「思えばこの二年半、クラスと部活でほとんど検定に時間を費やしてきたように思えます。この検定が、脚本家に直接役立つかどうかは分かりませんでしたし、入学当初とは進路が大幅に変わったので致し方ないのかもしれません。それでもやはり、検定勉強となるとエンジンがかかってしまっていました」

14　同・昇降口

康行と一磨が帰る支度をしている――

一磨は不機嫌そうな顔をしている。と、

雅也が入ってくる。

雅也「あれ、二人とも帰るところ」

康行「うん」

一磨「ああ」

雅也「かっちゃん、どうしたの？」

一磨「就職試験、落ちた」

雅也「え……」

一磨「何がダメだったんだろう」

康行「……」

雅也「何だろうね……まあ、それは採用担当者が決めたことだから」

一磨「大学行こうかな。今からでも間に合うようなところで。学校に来てた求人見ても、他に行けそうなところなかったし」

雅也「うん……まあ、どうするかはかっちゃん自身が決めることだから」

一磨「木内も、まだ決まってないんでしょ？

脚本家の事務所」

雅也「うん、まあね……」

一磨「どうするの？」

雅也「どうするって言われてもねぇ……」

難しい顔の一同。

N「今、三年二組の中では、進路が決まった者と決まらない者で、明らかに空気間の差が出ていました。康行やそーぴ、水澤など進路が決まった人や、就職試験に落ちたかっちゃんを目の当たりにしたとき、少なからず僕の中で進路に対する焦りが出始めていたのは、間違いのないことだったのでした」

つづく